掲載日:2024年03月31日,面名:DB0XX0,記事ID:K2024033100000013300 (C)河北新報社

うそでも楽しい話 次々

言葉のびっくり箱

伊奈かっぺい　著

青森県を拠点に活動するタレントのエッセー集。軽妙な語り口そのままに、日常の話題から時事問題、地域の文化への思いなどをつづる。うそでも楽しい話が好き、という著者のユーモアがあふれ、肩の力を抜いて楽しめる一冊だ。

8章構成で、計70編のエッセーを収める。ネタの源泉の一つは、50年以上続けている日記。著者にとっての日記とは「何をしたかの記録ではなく、朝でも昼でも『思いつき』を書くもの」だという。

「日曜大工を始めた。はじめに作ったのは自分をあげておく棚」とは、日記の一節。著者ならではの「うそでも楽しい」話題が、次々とテンポ良く繰り広げられる。

青森ゆかりの小説家石坂洋次郎、歌手淡谷のり子（いずれも故人）らとの思い出や、津軽弁や東北の文化などについても、ユーモラスな視点でつづった。

「だまって生きていても悲しいことや苦しいことは向こうからやってくる」からこそ、「自分から進んでやるのは面白いこと」「日記には楽しいことしか書かない」と強調する。ユーモアに寄せる信念が伝わってくる。

各章の前後には「落書き帖（ちょう）」と題した、ひとことコーナーを設けた。「返す言葉が無い……だって借りた覚えが無いのだから」「組閣この世は澄みにくい」など、著者の短い「つぶやき」も味わい深い。

本の泉社03（5810）1581＝1500円。